



子供讃歌 (一九)

倉橋惣三

一八 弘誓の子

1 愛の自責と自省

子供讃歌も大分長くなつた。限りなく続く鉦脈とも思われるけれども、浅くしか掘り下げない小さい手には、またしても、寶石を逸して折角くの良鋳に申訳ない。浅いばかりでなく、掘り幅が狭いので、歌の節が甚だ単調になる。殊に、掘り易い個所しか掘つていないので、その掛け声にも、喜びにもしつかりした力が籠らない。子供讃歌といふながらも、一人の浮浪児に処を得させたこともなく、一人の非行児童を直し起したこともない。誰れだつて愛するだろうやうの子供を愛し、いわば誰れにでも教え得るやうな子供達を教えたに過ぎぬ。彼の讃歌に、楽しみ歌の小さいハーモニーはあつても、深刻な悲曲にも哀調にもならぬ所以である。

しかし、もとゞ、彼の子供讃歌は、子供に愛せられ教えられながら、彼自らが育てられた感謝の歌である。真に子供を愛し真に子供を教えた人々に、真に及び難きを嘆ずる告白の歌である。たゞ、子供を愛していることを知つて、子供に愛せられていることを知らず、子供を教ゆることのみを思つて、子供に教えられていることに心づかない、不謙虚に対して、敢て讃歌と名づけて、子供への謝恩とするのである。子供からの恵みに浴すのである。そうして、そうした幸福を以て暮しつゞけさせて貰つた生涯を、四方八方に向つて感謝するのである。

地球を覆うている草が緑だから、人生にいこいがあると言つた人がある。と同じく、世界に子供がいるから、人生

に、ごみがあるといえるかもしれない。彼は世の職業の中で、無心の美しい草花を相手とする園丁ほど、仕合せな職業はないと、いつも思うのであるが、たとえば、それにも似て、かわいゝ子供を相手とすることを職業とする彼も、世に仕合せな園丁である。彼は、そうした心境を、時たま十七字詩形に托して、同業の知己に披露したりするとき、好んで「園丁」の仮号を用い、ものずきな友人の一人は、そんなときの常用のために「園丁」という小さい落款(?)を篆刻してくれた位である。草花の方にいわせれば、随分迷惑千万な園丁もあろうし、この自称園丁も多分その一人だろう。けれども、彼の方では、ひたすら其の業を楽しませて貰つてゐるのである。少くも、自園の草花達は、それを容し或はあきらめてくれてゐる。そうして、屢々ありがた迷惑を感じながらも育つてゐる。つまり、この園丁の行き届かない手出しを甘受してゐてくれる。そこで、彼も平気で、甘受される喜びを甘受させて貰つてゐる。子等に対して然りき、孫らに対して今なお然り。甘業は尙不断につゞいてゐる訳である。更にまた、その甘業を自園の籬の外にまで延して、いゝ氣になつて、社会の子らにまで、その甘業の幸福と樂みを、ほしきまゝにさせて貰つた仕儀である。

しかし、極く正直のところをいえば、自園でも他園でも、彼がその幸福を感じずれば感ずるほど、自力の足らざるに苦しみ、自識の浅いのを恥じ、子供に濟まないと思ひ、申訳ないと思ふことが、またしても重なるのである。そのとき、彼は、自力に代る大きい慈悲の助けを求め、自識の及ばない深い聖訓を学ばずにはゐられないのである。

人間は、愛するものゝためにこそ、自己の力の足りないことが痛感せられ、愛する我心そのものさえ、純正でないことが自ら省みられる。

2 子 安 観 音

町でも村でも、辻や道ばたの小さい御堂の前で、一心に子安観音に合掌してゐる母達の姿にあらうことがある。その母達が去つた後に彼も亦そこを去り難く徘徊して、彼女等の祈願のきかれんことを念ずる。そういう人ごとばかりではない。彼自身が家に出産のあるとき毎に、狩野芳厓の名作「慈母観音」の複製篇額を、産室に懸けることを常例としてゐる。彼は必ずしも観音の行者ではない。又、妙法蓮華経観音普門品第二十五を精しく究めてゐるものでもない。たゞ、衆生済度のためには、身を三十三にも現じて、相手々々相応の姿となつて、親しく近づいて救ひの手を下

されるといふ大慈悲の心には、尊崇を禁じ得ないのである。子安観音、子育観音、慈母観音像も、子供を救わんための貴い慈悲化身の一つである。古ぼけた御堂の前に捧げられてある野花の一束にも、扉格子にくよりつけてある色あせた紅木綿のよだれかけにも、又、泥絵具で描いた貧しい絵馬類にも、彼は注視瞻仰することなしに行き過ぎ難いのである。

全身を捧げて子を生み、全心を尽して子を育て、己を以て子の幸福に代えんとさえ希うこと、母の如きはない、その母等に対して、

若有女人。設欲求男。礼拜供养観世音菩薩。便生福德智慧之男。設欲求女。便生端正有相之女。

と告げられる観世音菩薩の加護こそは、母ごころの切実な祈願である。彼は、専ら自己福利を念ずる多くの民間信仰にも、人間の弱さを同情するけれども、子供のためには、自己以上の力にも縋らんとする観音信仰には、人間の強さを尊敬せずにはいられない。

か弱い子らには成長の自然の自力がある。しかし、世は荒い。或は大火抗に推し落されもし、成は巨海に漂い流れもし、或は須弥の峰に在つて人の為に推し墮されもし、(観音経の句)災難を免るゝの自力弱く、又、之れを救い得るわれらの力も極めて弱い。真観清浄観、広大智慧観、悲観及慈観、広大な宇宙の力にたゞ祈らずにいられないのである。このとき、子供への愛の切なさに堪えずして、帰命頂礼、弘誓の大慈大悲に縋らんとする心こそ、子供讃歌の極致ではあるまいか。

3

『おさな子を容るせ、我に来ることをとむる勿れ、天国におるも
のは斯くの如き者なり』

ガリラヤの湖辺に、ヨルダンの河岸に、愛を以て静かに民衆の間を歩むキリストの姿は、一幅の聖画として、彼の心でありとずする。

『多くの人々彼れに従いしかば、こゝには彼等を医したまえり。……其とき、人々イエスの手を按けて祈らんことをねがい、おさなごを彼につれ来りければ、弟子これをとどめたり。イエス曰いけるは、おさなごを容るせ我に来ることをとむる勿れ、天国におるものは斯くの如き者なり。即ち彼等に手を按けてこゝを去りぬ』(馬太伝第十

九章)

聖書の文は簡潔にして、そのうちに籠る情景と味解とを、読むものゝ会得に委ねる。画家ウィデーは、この場の情景を描いて、『子供をわれに來らしめよ』と題しているが、この含蓄深いキリストの言葉は、恐らくや、パスダロツチの言葉『子供に學べよ』となり、フレーベルの言葉『いざ、子供と共におらん』ともなり、子供を愛するもの、すべての心の源となつているのである。

キリストは、子供をたゞ慈しんだゞけではない。

『弟子イエスに來りいゝけるは、天国において大いなるものは誰ぞや。イエスおさなごをよび彼等の中に立てゝ曰いけるは、我まことになんぢに告げん。もし改りておさなごの如くならずば、天国に入ることを得じ。然ば凡そこのおさなごの如く自ら謙る者は、これ天国において大いなるものなり』(同第十八年)

なんぢら、この小さきものゝ一人をも慎みてあなどる勿れ。(同)

子供に對する敬重の語にして、斯くの如く高いものが他にあるうか。又曰く

『この小さきものゝ一人をつまずかず者は磨石をその頭に懸けられて、海の深きに沈められん方なお益あるべし』(同)

子供に對する冷淡を責める言葉にして、斯くの如く強いものが他にあるうか。彼は之等の言葉に接する毎に、子供を愛することの足りないのを自ら戒める前に、子供を真に貴ぶ心の低さと弱さを、自らに恥づるのである。

どうせ浅はかな此の子供讚歌を終るに當り、せめても、これらの古くして今に新しい訓えを引いて結びとする。